

# わが社のいち押し

ワード技研(中央区清新)は、自動車部品やプレス金型の設計などを手掛けています。中でも、開発と生産を同期化する「サイマル」(サイマルテニラスエンジニアリング)と呼ばれる技術を得意としています。この技術は、日常生活で目にすることはありませんが、実は普段乗っている自動車のドアやボンネットなどを生産する上では欠かせない存在です。また、設計図がない工業製品などを三次元(3D)スキャンし、再び生産できるような加工データを作成する「3Dリバースエンジニアリング」の事業も始めています。同社の川井聡社長は5月に社長就任したばかりです。

## ■大手メーカーと直取引

日産自動車を中心に、トヨタやホンダ、スバルといった名だたる完成車メーカー、それに「ティア1」とされる大手部品メーカーと直取引しています。早い時期から三元CADの導入を進め、今では計約40台を保有。非接触型の三次元測定器(3Dスキャナー)も2台持っています。

自動車のボディー部品は、1枚の金属板に対し、プレス金型で生産します。しかし、完成車メーカーのエンジニアが新しい部品を設計しても、それが実際に量産できるかは別です。生産ラインに乗せた時に、時間やコストがかかったり、あるいは複雑な形状だと、量産が難しかったりします。

そこで同社の「サイマル」が必要になります。自動車メーカーからの設計データを同社で受け取り、工場ですべてプレス成形したらどうなるか。試作品を作らず、コンピュータ上でシミュレーションをしていきます。改善点があれば、メーカー側にフィードバックします。「サイマル」によって、あらかじめ検証することで、金型の試作品の生産回数も減らせます。現在、同社では多種多様な年間100点以上におよぶ自動車部品の「サイマル」を進め、効率的に生産できる金型や生産工程までも提案しています。

海外展開も視野に

一方、数年前から始めたのが「3Dリバースエンジニアリング」です。これは、古くて設計図がない部品や製品の実物を、高精度な三次元スキャナーでスキャンし「加工データ」になる三次元CADデータを提

## 自動車部品生産を設計技術で支える

(株)ワード技研 代表取締役  
川井 聡さん



供するものです。スキャンできるのは、最小で直径3ミリから。最大だと5メートルにおよぶ大型部品もできるそうです。しかも、同じサイズで複製するだけでなく、例えば小さなフィギュアをスキャンし、それをイベントなどで展示する大きな人形の製作用データに変換することも可能です。ただ、同社は、依頼を引き受けるに当たり、完全なコピー商品の製作目的ではないことや、人体に関わる医療器具関連ではないことを条件としています。「この事業を育成し、経営の柱の一つに

していきたいです」と、川井社長は話しています。また、今後はリバース事業に注力するだけでなく、「サイマル」を中心とした設計事業の「横展開」も見据え、自動車で培ってきた技術を航空機部品や建設機械などにも拡大しようとしています。さらに「自動車産業が盛んな海外市場にも進出していききたいです」(川井社長)とも語っており、グローバル企業への脱皮も目指しています。